



ミュージアム・ゲーム①

さんしゆ じん ぎ そう だつ せん
三種の神器争奪戦!

あんのまる / 作

はい いろ
灰色ルト / 絵

目次

Contents

おもな登場人物

4

1 はじまりは『古事記』から

8

2 選ばれたプレイヤーたち

17

ROOM 1

3 一つ目の神器を手に入れろ！

30

4 旅は道連れ世は情け

47

5 テイロサウルスのしっぽ

57



ROOM 2

6 頭上にご注意ください

7 自分勝手なわたしたち

ROOM 3

8 本物を見きわめろ！

9 神を喰う力を！

10 炎の海の中で

11 ゲームの主演は

12 書きかえられた世界

あとがき

180

175

169

162

149

125

102

80



おもな
とうじょうじんぶつ
登場人物
Characters



くさの
草乃 スサナギ
Susanagi Kusano

うんどうのうりよく たか
運動能力が高く、プライドも
たか しやうがくろくねんせい おとこ
高い小学六年生の男の子。
たいそうせんしゅ
体操のジュニア選手。

かみ じき みこと
神喰 命

Mikoto Kamiziki

しょうらい こうむいん なるて かん
将来は公務員になって安
てい たく
定した暮らしをしたい、
ゆうとうせい しやうがくろくねんせい おんな
優等生の小学六年生の女
こ だけ
の子。「かしこく、正しく、
れいせい
冷静に！」がモットー。



たま てる まが ひめ
玉照 勾姫

Magahime Tamateru

ひめさま ゆうが
お姫様のように優雅で、
うえ め せん しやうがくろくねんせい
上から目線の小学六年生
おんな じんじゅ
の女の子。由緒ある神社
こうけいしゅ
の後継者。



はちや
八夜 ツクヨ

Tsukuyo Hachiya

いつもゲームを持ち歩く、
おとなしそうな小学六年生
の男の子。ゲームが得意。



ゲームマスター

かん ちよう

館長

Museum Director

ミュージアム・ゲームの
ゲームマスターを務める
謎の人物。仮面をつけて
いて、年齢や性別は不明。



やまと
大和 タケル

Takeru Yamato

命が塾の帰りに出会った、
明るく元気な小学六年生
の男の子。

世界せかいを書かきかえられるとしたら、

きみは、どんな世界せかいにしたい？

1

はじまりは『古事記』から

ぽかりと丸い月が浮かぶ夜。

「はあ、塾つかれたあ。」

夏休みの終わりをつげる、生ぬるい風がほおをなでた。

まぶしい満月を見上げて、わたしは重たいリュックを背負いなおした。

「今日の夜ご飯は、絶対お肉がいい。そのあと、絶対に橘のはちみつ漬けを食べる！」
バス停まで、あと数歩。一分でも早く帰って夜ご飯を食べたい！

そのとき。

「その本をよこせ！」

「いやだね。これはオレのだ！」

路地裏から、言いあらそう声が聞こえてきた。

うで時計で時間を確認する。

「バスは、五分後に来るから、時間はある……。」

そつと路地をのぞけば。

わたしと同じ、小学六年生くらいの男子が、五人の中学生にかこまれていた。「最後の一冊だから、やらないぜ！」

場ちがいなほど明るい声で言い切った男子の手には、本がかかえられていた。わたしがここで助けに行っても、力じゃ勝てない。

それなら、頭を使うしかない。

かしこく、正しく、冷静に、考えよう。

いつものくせで、こめかみをトントンツと指でたたいて、目を細める。くるくると回っていく頭の中で、ふいに答えが浮かんで。

わたしは、リュックについた防犯ブザーのピンを引きぬいた。

ピイイイッ

「うわ！ なんだ!？」

耳をつんぎくような音に、中学生たちが周りを見まわす。

わたしは、すかさず路地の手前からさげんだ。

「おまわりさん、こつちです！」

「やべ！ 警察が来る！」

中学生たちが、あわてて逃げていったのを見て、そつと路地に入った。

「きみ、大丈夫？」

「ありがとう！ お前、警察まで呼んでくれたのか？」

男子が、ニカツと笑つてわたしを見つめた。

「さっきのはハツタリ。」

わたしは肩をすくめて答えた。

「かしこく、正しく、冷静に！ が、わたしのモットーだからね。」

ふふんつとむねをはる。

「お前、頭いいんだな！」

「自分で言うのもなんだけど、けつこういいよ。この前、社会のテストで九十八点をとつたし、毎日八時間の勉強をがんばってるんだから！ それに、考える力があるって、先生

にほめられたこともあるもん。」

わたしの趣味と特技は、じまん話だ。いくらでも語れる。

「将来は、公務員になつて安定した暮らしをしたいから、勉強をがんばってるんだ！」

「へえー、つまんないな！」

アハハッと笑う男子を、わたしは半目でにらんだ。

「オレは、大和タケル。大和でいいぜ！」

「わたしの名前は、神喰命。わたしも神喰でいいよ。」

「長いから、命でいいや。」

大和は、『古事記』と書かれた古い本を大事そうにかかえていた。

『古事記』は、日本の神話などをまとめた、日本で一番古い歴史書つていわれているんだ。

なんで、こんなことを知ってるかというのと、とあるう、わさが流行っているから。

「大和も、あのうわさを、信じてるの？」

「もちろん！ オレの学校では、みんな信じてるぜ！」

「ブルームーンの夜、博物館で三種の神器をそろえると、世界を書きかえられる」
ううわさだ。

三種の神器っていうのは、『古事記』に登場する、勾玉、鏡、剣のこと。

いま、たくさんの人が神器について調べるために『古事記』を読んでいるんだ。

「どの本屋でも『古事記』が売り切れてるみたいでさ、本を持つてるオレを見た中学生が、追いかけてきたんだ。」

うわさでは、博物館でゲームやパーティーが開かれるとか、ゾンビや幽霊がでるとか、いろんな話が広がっている。

「今日がそのブルームーンだから、みんな必死なんだ！」

ほんと、バカらしい。

神器について学ぶより、一つでも多く都道府県の特産品を覚えたほうが、将来のためになるのに。

「命、いまから博物館に行こうぜ！」

「いや、やめとく。うわさに興味ないから。」

そんなうわさのために、帰りをおくらせたくない。

警察官のお母さんと弁護士のお父さんは、門限にきびしいんだから。なにより、お腹がお肉と橘のはちみつ漬けをもとめてる。

「バスが来るから、もう帰るね。」

そう言つてふり返つたとき。

プシューッ 目の前で、バスの扉が閉まつてしまった。

「うそ！ 次のバスは……三十分後じゃん。」

「じゃあ、待つてるあいだに博物館に行こうぜ！ すぐ近くだから！」

「はあ、わかつた。」

お母さんに連絡を入れて、わたしは大和と歩きだした。

満月が銀色に輝く夜。

「博物館なんて、ひさしぶりに来た。遠足ぶりかも。」

目の前にそびえる巨大な博物館は、月光に照らされて、ぼんやりと光をまとっていた。

「なあ、命はブルームーンの意味を知ってるか？」

「え、ブルーは青で、ムーンは月って意味だから、青い月ってこと？」

「ちがうぜ！」

大和が笑って、夜空を指さした。

「ブルームーンは英語で、めったにおきないこと」って意味なんだって。その意味をとって、ひと月に二回も満月になることを、ブルームーンって呼んでるらしいぜ！」

「たしかに、月は青くないね。それに、言われてみれば、今月の初めも満月だったかも。銀色の月を見上げれば、ぐりんっと大和が顔を向けてきた。

「一緒に来てくれたお礼に、本をやるよ！」

ぐいっと『古事記』をさしだす大和。

「え、いいの？ あんなに必死に守ってたのに。」

大和はニカッと笑ってうなずいた。

「一緒に、ゲームを楽しもうぜ！」

「いや、中には入らないよ。そろそろバスが来るから。」



手首につけた髪飾りをいじりながら、首を横にふった。

「絶対に行つたほうが楽しいぜ！」

そう言つてわたしのうでをつかんで、走りだした。

大和は話を聞かないタイプみたいだ。

「え、ちよつと！ わたし帰りたいただけ！」

「大丈夫、全部変わるから。」

「は？」

大和にいきおいよく手を引かれて、わたしは博物館に足をふみいれた。